

探し物はなんですか？

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

昨年3月末で大学を退職し、もっぱら原稿を書いたり資料を調べたりするのが自宅の小部屋になった。40年以上にわたる大学の研究室暮らしで溜まりにたまったものをかなり処分して多少は身軽になったが、スペースは以前よりかなり狭隘である。そのため、資料や道具類などそれなりに整理しておいたつもりでも、従来の配置と大きく変わっていて何かと探し回ることが多くなった。先日も寄贈する本にサインするための万年筆が見当たらない。普段はボールペンだが、今回は万年筆を使いたいと思ったものの、あちこち2時間くらい探しても出てこず、そのうちまさしく井上陽水の歌のように何を探しているのかわからなくなった。寝る前にふと思いだして普段使わない引き出しを開けると、万年筆が鎮座していた。40年の間に研究室での物の配置に関する思い込みが形成されていたことがよく分かった。思い込みを排除し、虚心になって基本に忠実に行動することの必要性を改めて実感した次第である。

一人の作業者が、大きな直径のパイプかダクトの上に安全帯をつけずに乗っていた。手ぶらでは安定して立ってられる人である。しかしその人が両手を使った作業に集中していたためか、滑落したという事例がある。自身の経験から、ちょっとした作業なので滑落などしないといった思い込みがあったためであろう。従来から十分に慣れ親しんでいたシステムなり装置、環境等から状況が異なるとき、新たな状況に慣れるまたは適合するまでの過渡的な状態では、その違いを十分に認識することが重要である。新しいものにはそれまでと異なった特性や機能があり、機械装置であれば速さや出力が異なり、以前と同じ取り扱いではうまくいかないことがあるということ。慣れ親しんだものによって植え付けられたある種の思い込みを排除することが重要な課題である。

災害に関して言えば、現在、危機管理マニュアルなどかなり整備されているはずで、それによる訓練や演習も頻繁に行われている。しかしその内容に、市民はこのような行動するはずだ、電気は何時間かで復旧するはずだ、自治体の職員は発災後何時間で本庁に集合できるはずだといった「思い込み」が入っていないだろうか。訓練はそのような思い込みを排除するためのものであるが、訓練ではうまくいっても危機的状態において、また何よりそれまで訓練に参加していない人たちが対象である場合にはどうだろうか。

最近特に心配なのがモバイルの携帯電話やスマートフォンである。日ごろ何

かと便利に使っているからこそかえって危ないように思う。緊急時でも、つながってあたりまえ、情報がとれるはずだと、使用が爆発的に増えるからだ。携帯電話数が極めて少なかった阪神淡路大震災の折には使用量は問題化せず、むしろモバイル機器は緊急連絡などに活用できるとの神話が生まれたように思う。一方、10年前の東日本大震災時にはアクセスが殺到して必要な連絡もできなかった記憶がある。

こうした使用の激増にどう対処するのか。基地局の安全対策だけでは不十分だと、漸く政府でも話が出始めたようで、地上の基地局に依存しない衛星電話の拡充も視野に入れて対応がとられ始めている。双方向の通信ならばそれでいいだろう。ただ、こと災害対応においては、電話は双方向という思い込みを排除して、一方向への通信連絡も考えておきたい。例えばAMラジオの活用をもっと広げられないだろうか。非常電波で自動起動する地域に密着したFM放送などで事業が展開されているようであるが、FMならば受信に制約があり、情報が伝わりにくいことも予想される。通常のAMであればより広域に情報を発信できるはず。正確なデータを適切な時点に提供することが重要で、比較的狭い領域向けと広域対応の2段構えのシステムを構築してはいかがか。何を言ってるのだ、今頃、そんな体制はとっくに出来上がっている、とのお叱りを受けるかもしれない。政府や自治体の対応はいつでも遅いという著者の「思い込み」だろうか？

